景徳院・五重塔における松木輝殷の設計手法について

K02038　木戸麻亜子

Ⅰ　はじめに

Ⅰ－1　研究背景と目的

近世中期以降、甲斐国河内領下山（現在の山梨県南巨摩郡身延町下山）を拠点として「下山大工」と呼ばれる大工集団が数多くの建築を残した。

その下山大工として江戸後期から明治期にかけて活躍した一族が松木家である。同家には現在、当時のものと思われる資料が約千点残されており、これらは松木家及び下山大工についてその仕事や果たした役割など、当時の情報を伝える貴重な資料である。

本研究では、松木家に残された資料の中から「景徳院」を取り上げる。中でも明治34年に、火災の復興事業として松木輝殷（てるしげ）によって計画された五重塔について、古文書及び絵図を基に分析し、下山大工である松木輝殷の設計手法を明らかにすることを目的とする。

Ⅰ－2　研究方法

(1) 景徳院及び松木輝殷による作品の見学及び実測調査を行い、構造・意匠形式を把握する。

(2) (1) 及び松木家資料である景徳院「五重之塔新築再建之図」を基に各部材の設計を行い、五重塔を三次元CADで立ち上げる。

(3) 各年代の五重塔との比較・分析により、景徳院五重塔における松木輝殷の設計手法を明らかにする。

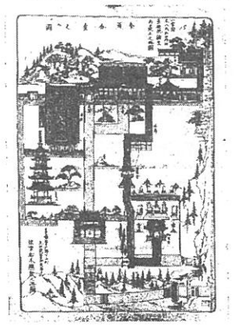


図1　景徳院諸堂再建立之略図
〔明治32年〕

図2　五重之塔新築再建之図
〔明治34年〕

Ⅱ　松木輝殷について

松木輝殷は天保14年（1843年）に大工松木運四郎の長男として生まれた。明治8年（1875年）、松木八三郎の名で東山梨郡初の洋風建築である日川学校を建て、同年松木輝殷の名で中巨摩郡に睦沢（むつさわ）学校を建てた。睦沢学校は国の重要文化財に指定され、藤村記念館として現存している。輝殷は藤村式建築と呼ばれる洋風建築を数多く手掛けたが、神社仏閣や彫刻、住宅、橋梁など幅広い分野で活躍している。

Ⅲ　景徳院について

天正10年3月11日、織田・徳川連合軍に追いつめられ、郡内領主小山田信茂の裏切りにあい、進退窮まった武田勝頼は田野（現在の山梨県甲州市大和町田野）で滅亡した。景徳院は田野集落に、徳川家康が武田家一族の冥福を祈るため1582～1588年に6年の歳月をかけて建立した寺院である。境内には、勝頼夫妻と信勝が自害した場所という生害石や、遺品・木像を安置する御霊屋（甲将殿）と墓所があり、これは勝頼の二百年遠忌の際に建立・整備されたものである。当寺は当初、壮大な伽藍を誇ったと伝えられているが、天保・弘化年間の2度の火災と、明治27年の大火で山門を除くすべての堂宇が失われてしまった。

現在、景徳院には山門の他に本堂、庫裏、鐘楼堂などが建っているが、いずれも昭和・平成期に再建されたものである。境内全体と武田勝頼の墓が県指定史跡に、山門は県指定有形文化財に指定されている。

松木輝殷と景徳院

明治27年6月	景徳院本堂の設計を行う。〈51歳〉
(1894年)	「東八代郡田野村景徳院本堂地絵図」
明治32年8月	景徳院復興計画絵図を描く。〈56歳〉
(1899年)	「景徳院建物略図」
明治34年4月	景徳院の再興を助ける。〈58歳〉
(1901年)	「堂宇再建費寄付金募集原稿」
明治40年7月	景徳院勝頼廟彫刻を手掛ける。〈64歳〉
(1907年)	「景徳院勝頼公御霊屋建築彫刻手間書」

指導教員　伊藤　洋子 教授

Ⅳ　各年代の五重塔との比較

Ⅳ－1　柱間寸法と枝割

表1　五重塔の柱間寸法と枝割　〈単位：尺〉

名称	年代	層	総間 寸法	総間 枝数	総間 一枝	中央間 寸法	中央間 枝数	中央間 一枝	脇間 寸法	脇間 枝数	脇間 一枝	逓減 寸法	逓減 枝数	逓減 率	摘要	備考(注)
法隆寺五重塔	奈良前期【古代】	一	21.175	—	—	8.845	—	—	6.165	—	—		—	1		報
		二	18.69	—	—	7.97	—	—	5.36	—	—	2.485	—	0.883		
		三	15.96	—	—	7.1	—	—	4.43	—	—	2.73	—	0.754		
		四	13..3	—	—	6.22	—	—	3.54	—	—	2.66	—	0.629		
		五	10.65	—	—		—	—	5.325	—	—	2.65	—	0.503		
醍醐寺五重塔	天暦6年952年【古代】	一	21.89	—	—	7.96	—	—	6.965	—	—		—	1		報
		二	19.45	—	—	6.95	—	—	6.25	—	—	2.44	—	0.889		
		三	17.295	—	—	5.965	—	—	5.665	—	—	2.155	—	0.79		
		四	15.11	—	—	5.15	—	—	4.98	—	—	2.185	—	0.69		
		五	13.51	—	—	4.57	—	—	4.47	—	—	1.6	—	0.617		
海住山寺五重塔	建保2年1224年【中世】	一	9.305	22	0.41	3.285	8	0.411	2.875	7	0.41			1	二手先	報
		二	8.455	19	—	3.085	7	0.44	2.68	6	0.447	0.59	—	0.909	二手先	
		三	7.91	19	—	2.89	7	0.413	2.51	6	0.419	0.535	—	0.85	二手先	
		四	7.31	18	—	2.55	6	0.425	2.38	6	0.397	0.6	—	0.786	二手先	
		五	6.66	18	0.416	2.49	6	0.415	2.085	5	0.417	0.65	—	0.737	二手先	
明王院五重塔	貞和4年1348年【中世】	一	14.4	28	0.514	5.14	10	0.514	4.63	9	0.514			1	総間：28	報
		二	13.37	26	—	4.98	10	0.498	4.195	8	0.524	1.03	2	0.928	(初重　26	
		三	12.34	25	0.494	4.44	9	0.494	3.95	8	0.494	1.03	(2)	0.857	の　24	
		四	11.31	22	0.514	4.11	8	0.514	3.6	7	0.514	1.03	(2)	0.785	枝割）22	
		五	10.28	19	0.541	3.78	7	0.541	3.25	6	0.541	1.03	(2)	0.714	20	
厳島神社五重塔	応永14年1407年【中世】	一	15.04	32	0.47	5.64	12	0.47	4.7	10	0.47			1		図Ⅰ
		二	13.63	29	0.47	5.17	11	0.47	4.23	9	0.47	1.41	3	0.906		
		三	12.22	26	0.47	4.7	10	0.47	3.76	8	0.47	1.41	3	0.813		
		四	10.81	23	0.47	4.23	9	0.47	3.29	7	0.47	1.41	3	0.719		
		五	9.4	20	0.47	3.76	8	0.47	2.82	6	0.47	1.41	3	0.625		
東照宮五重塔	文政元年1788年【近世】	一	16	32	0.5	6	12	0.5	5	10	0.5			1		図Ⅱ
		二	14.5	29	0.5	5.5	11	0.5	4.5	9	0.5	1.5	3	0.906		
		三	13	26	0.5	5	10	0.5	4	8	0.5	1.5	3	0.813		
		四	11.5	23	0.5	4.5	9	0.5	3.5	7	0.5	1.5	3	0.719		
		五	10	(20)	(0.5)	4	(8)		3	(6)		1.5	3	0.625	扇垂木	
景徳院五重塔	明治34年1899年	一	18.48	30	—	6.93	12	0.578	5.78	9	0.642			1	扇垂木	絵図
		二	16.83	30	—	6.27	12	0.523	5.28	9	0.587	1.65	—	0.911	扇垂木	
		三	14.85	26	—	5.94	10	0.594	4.46	8	0.558	1.98	—	0.804	扇垂木	
		四	12.71	23	—	4.79	9	0.532	3.96	7	0.566	2.14	—	0.688	扇垂木	
		五	11.22	19	—	4.29	7	0.613	3.47	6	0.578	1.49	—	0.607	扇垂木	

(注)「報」は修理工事報告書
「図Ⅰ」は当該都道府県教育委員会の保存図面
「図Ⅱ」は当該社寺の保存図面

五重塔の変遷

浜島正士氏の先行研究によると、古代の塔は柱間と軒の極割りとの間に何ら関係はなく、いわゆる枝割の考え方は全く存在しない。古代の塔は枝割の拘束を受けないことから、柱間の逓減について、一般に他の年代より大きな率を示すものが多い。また、初重の柱間寸法の決定についてみると、例外なく完数をとったものと思われる。

中世になると、まず海住山寺塔のように初重にだけ枝割の制がみられるものから始まり、ついで明王院塔のごとく初重の枝割で二重以上の総間を決定しながらも、結果としては各重個々の枝割を示すものになる。やがて、厳島神社塔に至って初めて、各重を同一枝割で統一する完全な枝割の制がみられるようになるのである。こうして枝割によって各重の柱間を決めるようになると、枝数の決め方におのずと制約が生まれるので、中世以降の塔に関しては柱間の逓減率にあまり差がなくなり、そこに時代上の変化は認められなくなる。

近世の塔は中世の流れを受けて、いずれも各重にわたって一定の枝割で統一されている。初重の枝割は塔の規模その他によって異なるが、逓減については各重とも各間1枝宛、総間で3枝落ちとするものが多い。

景徳院五重塔

景徳院五重塔は明治34年に計画されたものなので、時代的には近世の塔に近い値をとるはずであるが、中の間と脇の間で一枝寸法が全く一致しないことが、一般的な近世の塔とは異なっている。つまり、景徳院五重塔においては枝割の考え方が用いられておらず、各重の逓減についてはまず初重柱間長さを決め、二重柱間長さは初重の9割、三重は8割、四重は7割、五重は6割という風に決めていったと考えられる。この様な柱間長さの決定法は古代の塔に見られるもので、表1の醍醐寺とは特に似通っている。

また、枝割の考え方が用いられていない理由として、各重が扇垂木で設計された可能性が考えられる。「五重之塔新築再建之図」（図2）において、垂木小口の間隔が端にいくに従い広くなる傾向があることや、松木家資料の中から松木輝殷のものとして「五重塔五重目を扇垂木積」という古文書が見つかったことも、この可能性を示している。

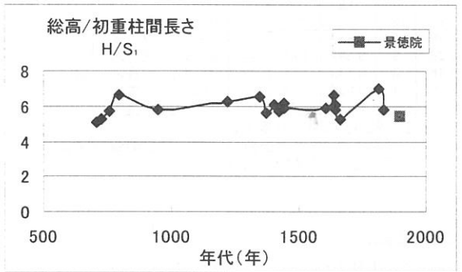
Ⅳ－2　高さ

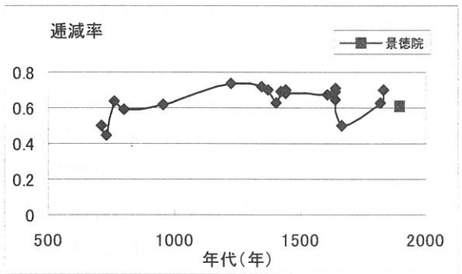
五重塔の変遷

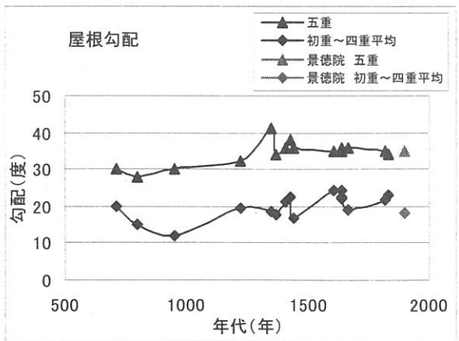
五重塔における総高をH、初重柱間をS_1としたとき、H/S_1は最勝院五重塔など一部の例外を除けば、時代がくだると大きくなる。すなわちこれは、塔が次第に細長くなる傾向にあることを示している。

逓減率についても、厳島神社五重塔・最勝院五重塔・東照宮五重塔などが小さい値をとっているが、一般的には時代がくだると大きくなる傾向にある。

屋根勾配に関しては、まず五重の勾配は1400年頃から一定の値をとるようになるが、それ以前は時代とともに大きくなっている。初重～四重の平均は一見ばらついた値をとっているが、勾配が20度を超えるものは中世から近世にかけて増えているので、その点に注目すると屋根勾配は時代がくだるにつれて傾斜角度が大きくなる傾向にあるといえる。







景徳院五重塔

グラフより景徳院五重塔のH/S_1、逓減率の値は全て近世の塔と比べて小さい値となり、古代から中世にかけて建てられた塔の値に近いものであることがわかる。

屋根勾配については、五重は近世に多くみられる値となったものの、初重～四重の平均に関しては傾斜角度が20度を下回る結果となり、やはり近世の多くの塔と比べて小さい値をとっている。

以上より、景徳院五重塔は枝割の制が広く確立する以前の、古代から中世前期の頃の塔と似たプロポーションをしているといえる。

*逓減率:ここでは初重柱間長さに対する五重柱間長さの比率。

Ⅴ　景徳院五重塔の特徴

彫刻

五重塔の初重・二重には彫刻が描かれている。これら彫刻や禅宗様の木鼻は、松木輝殷が手掛けた寺院や神社にも多くみられる。この様に、彫刻などを多用した装飾性の強い建築は、近世における山梨県の社寺建築の特徴であるともいえる。

表2　構造・意匠形式

	初層	二層	三層	四層	五層
建築名	景徳院五重塔				
寺院住所	山梨県甲州市大和町田野389				
宗派	曹洞宗				
年代	明治34年(1899年)				
屋根材料	本瓦葺				
垂木	(扇垂木)				
長押	無	無			
蟻	有	有			
内法	有	一			
腰	無	一			
切目	有	一			
地					
貫					
頭	無				
飛	無				
内法	無				
腰	無				
地	無				
木鼻	有:禅宗様木鼻				
組物					
種類	三手先				
尾垂木	有				
通肘木	有				
実肘木	有				
蟇股	無	有			
縁・高欄	無	擬宝珠高欄			
窓	連子窓				
戸	初層:桟唐戸				

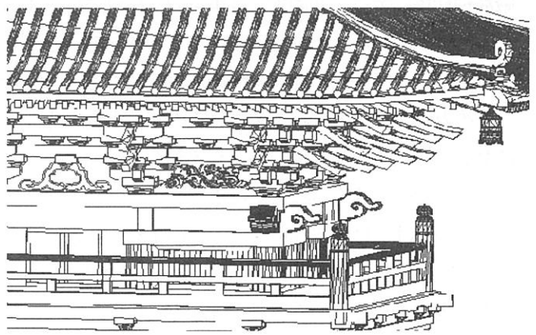


図3　三次元CADによる景徳院五重塔　二重詳細

蕨手

屋根の上に乗せられた蕨手は、他の五重塔にはみられない、景徳院五重塔特有のものである。松木輝殷が何故蕨手を設けたのかは不明であるが、同市にある大善寺厨子の蕨手に形状がとても似ており、この影響を受けたのではないかと思われる。

*蕨手:蕨の末のように曲線の先端が巻き上がった形のものの総称。神輿の降り棟の先、高欄の笠木の先、太刀の把頭、石灯籠の笠などに見られる。

*大善寺（山梨県甲州市勝沼町勝沼3559）:真言宗の寺院で、寺伝では養老2年（718年）に行基によって開創されたとある。本堂（薬師堂）〔1286年〕は県内最古の建造物で、鎌倉時代の和洋建築の代表的な遺構として、厨子〔1355年〕とともに国宝の指定を受けている。

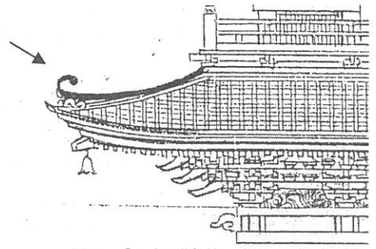


図4　「五重之塔新築再建之図」初重詳細

写真1　大善寺附厨子

表3　基壇の変遷

	名称	備考
古代	法隆寺五重塔	基壇
	海竜王寺五重小塔	基壇
	元興寺五重小塔	基壇
	室生寺五重塔	基壇
	醍醐寺五重塔	基壇
中世	海住山寺五重塔	縁
	明王院五重塔	縁
	羽黒山五重塔	縁
	厳島神社五重塔	縁
	興福寺五重塔	基壇
	法観寺五重塔	基壇
	瑠璃光寺五重塔	縁
近世	本門寺五重塔	縁
	旧寛永寺五重塔	縁
	教王護国寺五重塔	基壇
	仁和寺五重塔	基壇
	最勝院五重塔	縁
	東照宮五重塔	縁
	備中国分寺五重塔	縁
	景徳院五重塔	基壇

基壇

「五重之塔新築再建之図」（図2）には基壇が描かれているが、表3からわかるように基壇を設けるのは古代に多くみられた形式であり、一部例外はあるものの、中世以降は基壇の代わりに縁を設けるのが一般的である。

Ⅵ　おわりに

松木輝殷は何故復古的意匠設計を行ったのか

松木輝殷は景徳院五重塔において、枝割にとらわれず、枝割が確立する以前の形式・方法により設計を行った。その背景にあるものとしては、輝殷が何らかの形で京都や奈良に多く存在する古代及び中世前期の五重塔を目にしたのではないかと考えられる。特に、輝殷が明治の初めに多く手掛けた擬洋風建築は、当時の県令藤村紫朗が京都から持ち込んだものであると言われており、このことからも輝殷が京都を訪れた可能性は高い。

景徳院五重塔は全体的なプロポーションは古性を感じさせるものなのだが、細部意匠については近世の時代的特性に加え、景徳院周辺の寺社建築にみられる地域的特性があらわれていて、近世の塔と比べても異質なものである。同年に描かれた久遠寺山門の絵図や、その他多くの寺社では、枝割の制を用い歴史の流れに沿った建築を残している輝殷であるが、資金不足により現実に建てることができなかった景徳院五重塔においては独自性を示している。これは、擬洋風建築を学び、多くの藤村式建築を建てた松木輝殷が考え出した、同一の構造形式を持つため独自性をあらわしにくい五重塔における、一つの新しい形なのではないだろうか。

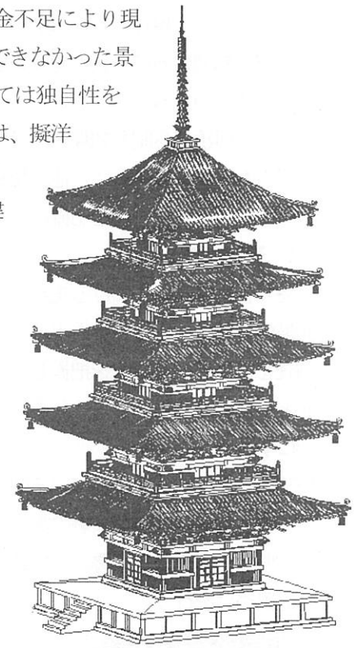


図5　三次元CADによる景徳院五重塔

《参考文献》
『日本仏塔集成』　濱島正士著　中央公論美術出版　平成13年2月
『下山大工史資料』　加藤為夫著　加藤美代子出版　平成16年2月
『甲斐百寺』　磯貝正義編集　郷土出版社　平成8年7月
『古建築の細部意匠』　近藤豊著　大河出版　昭和42年12月
『日本の近代建築（上）』　藤森照信著　岩波新書　平成5年10月
『国宝大善寺本堂修理工事報告書』
国宝大善寺本堂修理工事委員会　昭和31年1月